

ます。

中新世中期から後期にかけて、海進が進むと現在の相馬市や、原町市などの平野部は、海底となり砂岩や砂質泥岩が堆積しました。相馬市では、基盤の花崗岩の上に120 mの厚さの地層が堆積しました。

鮮新世に入っても、浅くなったり深くなったりの海退や海進を繰り返しながら、相馬市では砂層をはさむ砂質泥岩が、さらに170 mも堆積しました。この地層の年代は、北は仙台市の八木山の竜の口層の年代に相当し、南は、いわきの多賀層群に相当すると考えられます。一方、この新第三紀の始め（2000万年～2500万年前）の頃、象類の仲間でも

最も古いとされているステゴロホドン象が大陸からやってきて、いわき地方にも当時すんでいました。

図は平市中山の久世原団地で、昭和46年3月発見されたステゴロホドン象の大臼歯で、現在いわき市文化センターに展示されています。



ステゴロホドン象の大臼歯

7. 氷期と間氷期のできごと（200万年～1万年前）

第四紀の始まりは、人類の出現と、もうひとつ氷河のおとずれです。しかし、氷河時代が長く続いたわけではなく、3回の間氷期といって温暖な時代もありました。

氷河期には結氷するため海水面が下り、間氷期には氷がとけるため海水面が上昇しました。そのため浜通りの平野は海面から顔を出したり、海面下に入ったりしました。この海の進退は、相対的な土地の隆起や沈降現象となり、河川の浸食営力の激しい期時や弱い時期という形で現われ、浜通りには5段の段丘が形成されました。

洪積世中期のミンデル・リス間氷期（38万年～24万年前）に海拔180 m～100 m